『西南アジア研究』No. 89, 2019

越境者の記録から見る 18 世紀末～19 世紀前半のロシア・新疆貿易

Russo-Xinjiang Trade in Travel Records : c. 1780-1850

濱　本　真　実
Mami HAMAMOTO

Abstract　This paper elucidates changes of trade routes between Russia and Xinjiang from the end of the 18th century till the middle of the 19th century on the basis of various Russian travel records. The author utilizes many travel reports in this paper, but she especially focuses on three records. The first one was written by a Russian soldier Filipp Efremov, who was enslaved in Bukhara, then escaped and traveled to Xinjiang, and returned to Russia in 1782. The second record was written by a Tatar merchant Faizulla Seifullin, who visited Xinjiang in 1820's according to instructions of the Russian government. The author of the third travel report is Porfirii Ufimtsev, a Russian who was trained in Tatar language in his childhood to become a trader, and visited Xinjiang in 1840's as a faked Tatar merchant.

The analysis of this paper shows that Muslim merchants of the Russian Empire engaged in the Russo-Xinjiang unofficial trade in the early 1780'. They went to the cities in Kashgaria through Central Asian cities, and sometimes they went to Aksu through the Kazakh Steppe. Around 1800 Muslim traders from Russia visited Ghulja and Chuguchak in the northern Xinjiang through the mediation of Kazakhs, who were allowed to trade with the Qing government in these cities already in 1760's.

Since the beginning of the 19th century, the Russian government had adopted various policies to develop Russo-Xinjiang trade, and the trade routes between Russia and the northern Xinjiang was established in 1810's. Muslim traders from Russia began to visit even Ladakh and Kashmir through Xinjiang in this period. However, traffic between the northern and the southern Xinjiang was sometimes restricted for these traders. Faizulla Seifullin was sent to Kashgar in 1821 to find a direct route from Russia to Kashgar via the Kazakh Steppe. Though the direct route was opened, political situations in Kashgaria became unstable in the second half of the 1820's, and trade between Kashgaria and Central Asia diminished. Instead, trade between Russia, Central Asia, and the northern Xinjiang flourished. In 1830-1840's Muslim traders from Russia traded in cities in Xinjiang actively, and the Russian trade with the northern Xinjiang increased. Kenesary Revellion in the Kazakh Steppe（1837-47）gave a severe blow to Russo-Xinjiang trade, but even in this period this trade continued, and the influence of the rebellion was diminished in 1840's.

Thus, the trade routes between Russia and the northern Xinjiang, which was originally considered unprofitable because of high-cost mediation of Kazakhs and the government trade system in the northern Xinjiang, became major trade routes between Russia and Xinjiang in 1830-40's. The reason of this change is unstable political situations in Kashgaria and Central Asia, loosened restrictions for Russian goods and Russian Muslims in Xinjiang, and upsurge in demand of tea in the Russia Empire.

Keywords　Xinjiang（新疆）, Ghulja（グルジャ）, Semipalatinsk（セミパラチンスク）, Siberian Line（シベリア要塞線）, Tatar merchants（タタール商人）,

は　じ　め　に

17 世紀から 18 世紀半ば，現在の新疆北部のジュンガリアを本拠とし，東トルキスタンのオアシス諸都市をも支配した遊牧政権ジューンガルと，ロシアとの間では，貿易が行われていた。ロシアとジューンガルとの貿易には，バイカル湖南のセレンギンスクからウルガ（フレー，ウランバートル）方面に抜ける交易路とともに，西シベリアのタラ，ヤムィシェフ，セミパラチンスク，コクペクトゥ，チュグチャクからウルガに抜けるヤムィシェフ・ルートも利用されていた［Razgon 1999 : 219］。1746 年にジューンガルからロシアに帰国したロシア人商人ヴェルホトゥロフ Verkhoturov の情報によれば，シベリア商人を中心とするロシアの商人 21 人と，ジューンガル君主ガルダン・ツェリンの臣下となった 25 人のロシア人住民が，ウルガ，カシュガル，ヤルカンド等にいた［Potanin 1868 : 46-47］。しかし，1750 年代後半の清朝によるジューンガル征服および東トルキスタン併合により，状況は一変する。

清朝によるジューンガル征服の結果，ロシアは西シベリアでも清朝の領土と接近することになった。ロシア政府は，それまでの対清国貿易の窓口だった東シベリアのキャフタに加え，ロシアにとってより交通の便がよい西シベリアから，清朝治下の東トルキスタン，すなわち新疆を経由する対清国貿易開始を望んだが，清朝政府は 1851 年に至るまで，西シベリア経由の対露貿易を公式には認めなかった[1)]。

しかしながら，1851 年以前にも，非公式なロシア・新疆貿易は活発に行われていた。ロシアは，毛織物，綿織物などの布や布製品，皮革，お盆や鏡などの小間物，時計やアコーディオンなどの機器等を輸出し，新疆からは，木綿織物，藍色布のほか，禁制品の茶，大黄，元宝銀，アヘンなども輸入していた。ロシアの対新疆貿易については，露清貿易史［Sladkovskii 1974］のなかで，また，ロシア・中央アジア貿易史や［Ziiaev 1983 ; Kasymbaev 1990 ; Galiev 1994 ; Gibadullina 2013 ; 2017］シベリア商業史［Razgon 1999］の一部としても，副次的に研究されてきた。近年，このテーマに絞った Aldabek 2001 が出版され，日本でも野田 2009，Noda 2012，中村 2018 等の研究が出て急速に研究が進展し，当時のロシア・新疆貿易の大枠は明らかになったと言える。しかし，この貿易の時代ごとの特徴や変化といった詳細に関しては，未だ明らかでない部分も多い。

本稿は，18 世紀末から 19 世紀前半にかけての様々な時期に記された，ロシア・新疆間の越境者によるロシア語の記録に注目しながら，ロシア・新疆貿易の具体的側面と，時期による交易路の変化を明らかにしようとする試みである。19 世紀前半のロシア・新疆貿易の交易路については，野田が 1. アルタイ（ウリャンハイ）経由，2. ブフタルマとホヴド，チュグチャク（タルバガタイ）間の路，3. カザフ草原経由，4. コーカンド・ハン国（時にブハラも）経由，の 4 つに整理している［野田 2011 : 187］。本稿ではこの 4 つのルートの

1） 1851 年に露清間でイリ通商条約が結ばれる過程については，塩谷哲史 2017 を参照。

うち，3. カザフ草原経由のルートの多様性と，このルートが19世紀半ばまでに主要なルートとなっていく過程を明らかにしたい。

本稿で注目するのは，(1) 1774年に捕虜奴隷としてブハラに連行され，主人のもとを脱走したのちに新疆に入ったロシア人下士官エフレモフ，(2) 1820年以降，ロシア政府の意向に沿って新疆に赴いたセミパラチンスクのタタール商人セイフッリン，(3) シベリアのロシア人大商人によってタタール語教育を施されたのち，タタール人を騙って1842–46年にグルジャを訪れたロシア人ウフィムツェフ，による3つの記録である。ロシアから新疆に赴いた人物による記録はこのほかにも存在し，その多くについて以下に言及するが，ここに挙げた3つの記録は，ロシア・新疆間の交易路の変遷や，当時の貿易の具体的な様子を知る上で重要な情報を含んでいるにもかかわらず，これまでのロシア・新疆貿易研究のなかで大きく注目されることがなかったことから，記録自体を紹介することにも意味があると考えられる。

本稿には，筆者の能力不足により中国語文献を利用できていないという欠点があり，新疆の状況の分析や新疆側からの視点が不十分である点は否めないが，佐口 1963 ; 1966，松浦 2002，華立 2012，Fairbank 1978 といった研究によって補うよう努めた。

なお，本稿では，グレゴリオ暦より18世紀は11日，19世紀は12日遅い露暦を用いる。

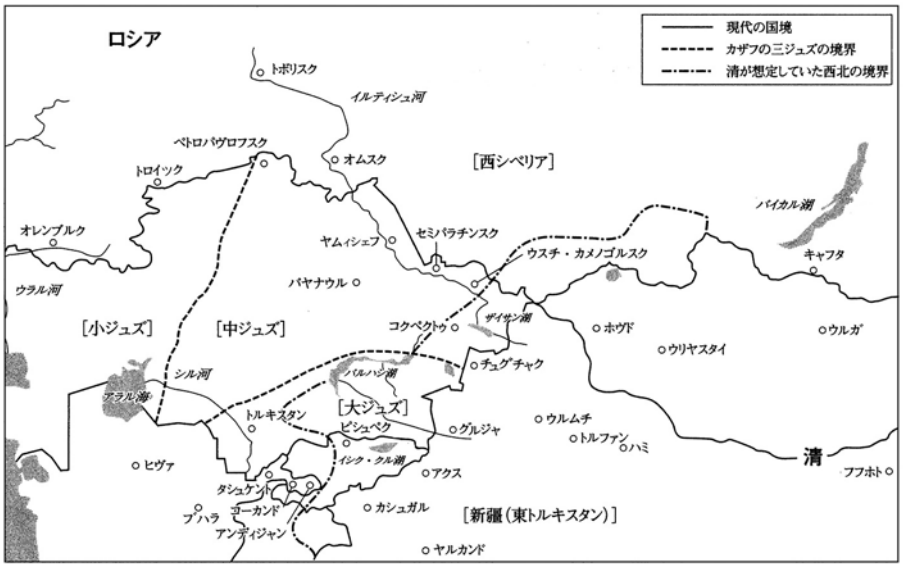
Ⅰ 1780～1810年代：エフレモフの新疆訪問とその後の交易路の変化

1 ロシア軍下士官エフレモフの中央アジア，新疆，インド，英国紀行[2)]

ウラル山脈西側の現キーロフ生まれの軍曹フィリップ・エフレモフ Filipp Efremov は，エカチェリーナ2世治下のロシアを揺るがしたプガチョフ反乱（1773–75年）の戦乱のなか，1774年にカザフの捕虜となった。ロシア人捕虜は，ある者はヒヴァに，ある者はブハラに連行されたが，エフレモフはブハラで，ブハラの宰相（アタリク）で事実上の支配者だったダーニヤール・ビイ[3)]の奴隷となった。彼は，イスラームの受容を拒んだために拷問を受けたが，キリスト教の信仰を護ったまま，ダーニヤール・ビイに忠誠を誓うことでダーニヤー

2） エフレモフの紀行文は，1784年に手稿が完成され，それを下敷きに1786年に彼に知らされることなく第一版がサンクト・ペテルブルクで出版された。1794年には若干変更された第二版が彼自身によって同地で出版された。こののち，1811年に当時彼が住んでいたカザンで，カザン大学で歴史，地理，統計の講義を担当していたピョートル・コンドィレフ Petr Kondyrev によって，エフレモフの指示に基づき加筆修正された第三版が編纂された。1893年には，雑誌 *Russkaia Starina* No. 7（pp. 125–149）に，1784年に記された彼の手稿が，綴りの修正を施しただけの形で出版され（第四版），同じくこの手稿に基づきながらも第四版に多くの修正を施し注釈をつけた第五版が1995年に Vigasin & Karpiuk 1995 の一部として，第三版の再録とともに出版された。1959年には第三版に基づいた英訳［Kemp 1959］が出版されている［Vigasin & Karpiuk 1995 : 134–260］。本稿執筆に際しては，第三，四，五版を参照したが，引用部分では，新疆に関する情報が豊富な第三版を用いた。

3） ダーニヤール・ビイについては，さしあたり Kiugel'gen 2004 : 79–82 ; 314–320 を参照。



露清国境地域と中央ユーラシア（小沼 2014 : vi の地図をもとに作成）

ル・ビイの信頼を獲得した。そして，五十人長としてブハラ軍によるサマルカンド攻撃で戦功をたて，ダーニヤール・ビイから土地と百人長の位を与えられた。彼の隊には 20 人のロシア人が含まれており，その後はメルヴとヒヴァの遠征に参加した［Efremov : 13-22］。

ヒヴァ遠征の最中に，エフレモフは逃亡を計画した。援軍の要請のためにブハラに戻ったエフレモフは，ダーニヤール・ビイの使者として彼がコーカンドに派遣されるという書簡を偽造し，ダーニヤール・ビイのもとにいたほかの 2 人のロシア人奴隷とともに 1780 年[4]に逃亡した。マルギランにつくと，商人の装いを整えて隊商宿に宿泊した。そこで，ある商人たちが清国領のカシュガルに行くと聞き，これらの商人たちと同様の商品を買い付けたうえで，自分たちは「ノガイ」（中央アジアにおけるタタール人の呼称）であると名乗って共にカシュガルに向かった。道中，ロシア人の仲間を一人，病で失った。カシュガルからアクスに行き，またカシュガルに戻ってからヤルカンドに向かった。ヤルカンドで様々な商品を入手してラダックに向かう途中，2 人目のロシア人の仲間を失った。ここでエフレモフは，3 人のマッカへの巡礼者に出会い，彼らに同道してカシミールに行き，カシミールからデリーに至った。デリーで出会ったアルメニア人の援助を受け，カルカッタに行ってそこから船で英国に渡り，ロンドンに到着した。ロンドンのロシア領事の手配によって 1782 年に海路でサンクト・ペテルブルクに到着し，ロシアへの帰還を果たした。帰国後は，陸軍准尉 prapolshchik の官位を与えられ，また，アジアの諸言語の知識があることから，外務参議会

4） 逃亡の年代は，紀行文には記されていないが，エフレモフ紀行文第三版に付された，彼を世襲貴族に列する勅令に明記されている［Efremov : 35］。

の通訳官となった。その後様々な官職につき，1796 年には世襲貴族身分が与えられた。本稿との関係でいえば，彼が 1803 年から 2 年ほど，ロシア・新疆境界に位置するブフタルマ税関の長を務めたことが注目される。1810 年にカザンに移り，ここで余生を過ごした［Efremov : 22–40］。

以上がエフレモフの紀行文の概略である。エフレモフのように，ロシア南方の草原で遊牧民に捕らえられ，東方諸国で奴隷となるロシア人は古来多くの例があるが，18–19 世紀の中央アジアにも多数のロシア人捕虜がおり，特にヒヴァの奴隷市場で盛んに売買されていた[5)]。ただし，ロシア臣民の捕虜の全てが中央アジアで奴隷とされたわけではなかった。エフレモフと同様にプガチョフ反乱時にカザフの捕虜となったタタール人，ガバイドゥッラー・アミーロフ Gabaidulla Amirov は，ムスリムだったために奴隷になるのを免れている[6)]。ロシア臣民の中でも，特にキリスト教徒のロシア人にとって，カザフ草原は奴隷となる可能性と背中合わせの危険な場所だった。

カシュガルについてエフレモフは，商業が盛んで「ここには様々な場所から来る商人が集まる。特に，ブハラ，サマルカンド，バルフ，ロシア（タタール人），清国から。」と述べている［Efremov108］[7)]。エフレモフがカシュガルの次に向かったアクスについては

> アクスは小ブハラ［すなわち新疆］[8)] の北に位置し，非常な商業都市である。ここにはロシアから多くがやってくるが，この先に行くことは稀である。というのは，清国人 kitaitsy がそれを妨げるからだ。この都市は山から流れる小さな川の右側の平らな場所にあり，サマルカンドと同じくらいの大きさである。ブハラからも人々はアクスにやってくる。ロシアから直接小ブハラにやってくる人々は，この都市にのみやってくると言われている。時にはロシアからの人々はカシュガルにもいるが，彼らはブハラからそこに至っているのである。清国人は小ブハラに，商業に携わる，キリスト教徒でない人々だけを通す。そのため，ヨーロッパ人がそこに至るのは非常に困難である。彼らは，なんらかのアジア商人の恰好をしたうえで，その場所の慣習を知っていなければならない。

5） エフレモフの例を含めた，18 世紀後半から 19 世紀の中央アジアの奴隷に関しては，Eden 2018 を参照。

6） ガバイドゥッラー・アミーロフは，カザフの捕虜となったあと，中央アジアからインドをめぐり，1805 年頃ロシアに戻った。帰国後はオレンブルク国境委員会の通訳に任じられ，数年後に逝去した。彼のメモと口述に基づく中央アジアとインドに関する記録が，Nebol'sin 1855 : 354–373 に出版されている。

7）「アンディジャン人」と呼ばれた，アンディジャンやコーカンド等のフェルガナ地方諸都市出身の商人は，ジューンガル時代から東トルキスタンにやってきており［野田 2011 : 211］，19 世紀前半には新疆の代表的な外国商人となるのだが，ここでエフレモフがアンディジャンやコーカンドなどの商人に言及していない理由は不明。

8） 引用文中の［ ］は，本稿筆者による補足を表す。以下同様。

［Efremov : 109］

と述べており，ロシアからアクスに，キリスト教徒でない商人，つまりカシュガルの説明で民族名が出されているタタール人が盛んにやってきていることを証言するとともに，キリスト教徒であるヨーロッパ人の新疆入境の難しさを強調している。この記述からは，1780 年代初頭に新疆への外国人の入境がかなり厳しくチェックされていたことがわかる。

清朝が公式にはロシア臣民の入境を許していない中で，1780 年代初頭に多くのタタール人が新疆を訪れていた背景には，清朝政府による 18 世紀後半のキャフタ貿易の中断がある。1762–68 年，1778–80 年，1785–92 年に，キャフタ貿易は 3 回中断されており，特に最後の中断期間中には密貿易が盛んになって，17 世紀半ば以降ロシア人にとって重要な薬剤だった大黄の，清国からロシアへの輸出が厳しく取り締まられたことが知られている［吉田 1972 : 172–178 ; 松浦 2002 : 431–432 ; 森川 2004 : 55, 62–65］。はじめの 2 回のキャフタ貿易中断も，ロシア・新疆間の密貿易を促したとみて誤りはないだろう。

1780 年代終わりまでに，キャフタ貿易の中断も影響して，ロシアから多くの商品がアクスに流れ込んでいたことが明らかになっているが［Fairbank 1978 : 85］，エフレモフの記述からも，ロシア・新疆貿易における新疆側の主要貿易都市が，アクスだったことがはっきりする[9)]。アクスは，新疆北路と南路をつなぐ位置にあり，18 世紀後半には「［清国］内地の商民や外藩の貿易商人が鱗のように集ま」［佐口 1966 : 222］る都市だった。ロシアの商人にとっても清国内地からの商品を入手するのに便のいい都市だっただろう。

アクスまできたロシア人が，その先に行くのは稀だというエフレモフの情報も興味深い。

9） ロシアとアクスを結ぶ交易路の道程について，エフレモフは何も述べておらず，また，18 世紀末のこの交易路についての他の情報も見つけられなかった。後代の情報としては，後述するラファイロフが 1813 年にセミパラチンスクからセミレチエを抜けて，イシク・クル湖からウチトルファン経由でアクスに達している［Rafailov : 73］。1850 年代後半にカシュガルを訪れたチョカン・ワリハーノフは，イシク・クル方面から，ウチトルファンまでの天山越えのルートを 3 つ示しており，第一のルートについては，イシク・クル湖岸からウチトルファンまで商人たちは 8 日，急げば 3 日で到着すると記している。第二のルートは，次章で触れるジベルシュテインが 1825 年に採った，ベデル峠を超えるものであり［Valikhanov 1985 T. 3 : 242–244］，玄奘三蔵の天山越えルートに近いと考えられる。このルートについてジベルシュテインは，隊商で 7 日の行程と記している［Zibbershtein 2007 : 245］。なお，ジベルシュテインは，アクスへはウチトルファンを通って行くほかない，と記しており［Zibbershtein 2007 : 253］，エフレモフもウチトルファンを通過したと考えらえるが，新疆北部も含めて考えるのであれば，アクスへは北のグルジャからムザルト峠を抜けて入る道もあった。ワリハーノフによれば，セミパラチンスクからカシュガルへの交易路としては，イシク・クル方面から天山を超えるより，グルジャ—ムザルト峠—アクス経由のほうが隊商にとって便利だった［Valikhanov 1985 T. 3 : 299］。なお，エフレモフの記述から，18 世紀末には，中央アジア諸都市を経ないロシア・カシュガル間の交易路はどれも広く利用されてはいなかったことがわかる。ラファイロフが 1812 年にロシア政府に提出した文書には，草原を突っ切って 35 日でセミパラチンスクとカシュガルを結ぶルートが記されているが［Rafailov : 37］，ラファイロフがこのルートを実際に使ったかどうかは不明。

これは，エフレモフが新疆を訪れた1780年代初頭には，カシュガリアから天山山脈北側の都市グルジャとチュグチャクにロシアの商人が行くことは稀だったということをも示している。この時期にはロシアの商人だけではなく，中央アジアの商人も，カシュガリアからグルジャ，チュグチャクに入るのが難しかった可能性が高い。1818年に記されたアブドゥル・ケリーム・ブハリーの書に「コーカンドとブハラの商人は七城地方［すなわちカシュガリア］に入ることはできたがその他の地区へ行くことは許されなかった」［Mir Abdoul Kerim Boukhary : 217］とある[10]。

この時期にカシュガリアからグルジャとチュグチャクへの商人の通行が容易でなかった原因は，当時のグルジャ，チュグチャクと，天山南路の伝統的な商業都市とで貿易が全く異なるものだったためだろう。新疆南部では，ジューンガル時代と同様，様々な民族による私貿易が継続していた[11]。これに対して天山山脈北側のグルジャとチュグチャクでは，ジューンガル滅亡後まもなく，その遊牧地に東進してきたカザフと清朝との間で，いわゆる「絹馬貿易」が行われた。カザフの馬に対する清朝側の需要が大きく，馬を安く入手する必要があったために，清朝はウルムチ（1758-65年），グルジャ（1761年以降），チュグチャク（1764年以降）での対カザフ貿易を官貿易とし，カザフとの私貿易を禁じた。また，カシュガリアのムスリムに対しても，カザフとの直接貿易は1767年に禁じられている。清朝側の意向により，清朝にとって便利なグルジャが清朝とカザフの貿易の中心都市となっていったのだった［佐口 1963 : 303-314 ; 小沼 2016 : 15-21］。エフレモフが新疆を訪れた1780年代初頭に，外来の商人がカシュガリアから新疆北部に行くのが難しかった背景には，清朝政府による，対カザフ貿易を新疆北部における官貿易に限定するという政策の影響が考えられる。

また，1780年頃には，グルジャがまだ新しい都市であり，商業が十分に発達していなかったことも影響しただろう。1750年代後半のジューンガル政権崩壊時，天山北部からはオイラト遊牧民が一掃され，また，戦争によって現地の人口が激減したため，新疆設立後に清朝政府によって移民政策が採られた。グルジャには1780年までにイリ九城と呼ばれる軍政都市群がつくられ，1775-1782年の時期にイリ渓谷の人口は7万人を越えたが，その三分の二以上は軍人とその家族が占めていた。これが1795年頃になると，イリ地方の人口は12万人を上回り，依然として軍人の割合は大きいものの，商民層が増大する［華立 2012 :

10） 佐口は，アブドゥル・ケリーム・ブハリーの書のこの部分を引用したあとに，コーカンド商人がグルジャに行くことができたと記すが［佐口 1963 : 365］，時期と出典を明示していない。なお，1779年にイリ将軍イレトゥによって，グルジャに家畜を売りに来たカザフなどからの情報収集が試みられた際，タシュケント商人が証言をしたことが知られている［小沼 2014 : 218］。タシュケントは，1800年代後半にコーカンド・ハン国の支配下に入ったが，カザフと関係の深い都市だった。イリ将軍に証言したタシュケント商人がカザフ草原からグルジャに入ったのか，或いはカシュガリアから入ったのかは不明なものの，次節に述べる，カザフを仲介役とした商人の天山北路貿易参入が，1779年にはすでに始まっていたと考えられる。

11） ただし，ジューンガル時代とは異なり，新疆のムスリム商人による外国貿易は厳しく制限されるようになった［小沼 2016 : 13-14］。

208-209, 238-245]。

エフレモフが記す，新疆，特にアクスに向かうタタール人を送りだしたロシア側の状況はいかなるものだったのだろうか。1743 年にオレンブルクが建設されて以降，カザフ草原を横切ってのロシアとカザフ，中央アジア間の貿易が盛んになった［濱本 2009 : 202-215］。そののち，ロシアにおける対中央アジア貿易の拠点はカザフ草原北辺の要塞線（西側がオレンブルク要塞線，東側がシベリア要塞線）に沿って東に広がっていく。1767 年にはシベリア要塞線上のペトロパヴロフスクとセミパラチンスクで「異教徒」との貿易が盛んになっていることが確認できる［SIRO 134 : 309］。対新疆貿易では，ペトロパヴロフスクから，1779 年にカシュガルにむけて隊商が出発しているが，この隊商は略奪に遭っている［Ziiaev 1983 : 96-97］。カザフ草原を横切る隊商は，遊牧民の略奪の危険にさらされていたのであり，これがロシアの対中央アジア・新疆貿易の大きな障害となっていた。

シベリア要塞線のうち，18 世紀初頭から建設が始まったイルティシュ要塞線上の諸都市では，18 世紀半ばまで盛んだった対ジューンガル貿易に代わって，1760 年代にはタシュケントなどの中央アジア諸都市との貿易が増加した。1777 年になると，オレンブルク要塞線上のトロイツクにおける対中央アジア貿易減少を食い止めるために，イルティシュ要塞線上の貿易はトロイツクでの市ののち，秋に現地住民の需要を満たす範囲で行うべきだ，という意見が出されるほど，イルティシュ要塞線上の諸都市における貿易は盛んになる［Ziiaev 1983 : 89］。イルティシュ要塞線上の都市のうち，18 世紀半ばまでの対ジューンガル貿易の中心はヤムィシェフだったが，ジューンガル滅亡後，1764 年には，南方のセミパラチンスクの貿易額がヤムィシェフのそれを上回り，18 世紀末には，セミパラチンスク，ペトロパヴロフスクとともに，セミパラチンスクよりさらに南のウスチ・カメノゴルスクも重要な貿易拠点となった［Ziiaev 1983 : 98-100］。これらの諸都市には，18 世紀後半から 19 世紀にかけて，主にカザン・タタールと呼ばれる沿ヴォルガ地方のタタール人が盛んに移住し，18 世紀末以降これらの都市に移住したタシュケント商人とともに，19 世紀になると対中央アジア・新疆貿易を担った[12]。これらの状況から，エフレモフの言う，ロシアから新疆に直接やってくるタタール人の多くは，ペトロパヴロフスクか，イルティシュ要塞線南部のいずれかの都市からやってくる商人だった可能性が高いと考えられる。

2　ロシアの対グルジャ，チュグチャク貿易開始

本節では，1800～1810 年代の様々な紀行文やその他の史料に基づき，この時期のロシア・新疆間の交易路の変化をたどる。

1800 年前後から，ロシア・新疆貿易の状況は大きく変化した。ロシア政府が貿易に直接

12）　イルティシュ要塞線上の諸都市へのタタール人の移住については Razgon 1999 : 231-233 ; Gibadullina 2013 : 83，タシュケント商人の移住については Ziiaev 1983 : 93, 100 ; Razgon 1999 : 226-227 を参照。

関与するようになったのである。18 世紀末から始まった，ロシア政府による，主にブフタルマと新疆北部との貿易の可能性の追求は，1803 年にブフタルマ税関の開設という形になって表れた［野田 2005 : 46 ; 中村 2018 : 52–54］[13]。また，ロシア政府は同じく 1803 年に，ペトロパヴロフスクとセミパラチンスクの税関に，オレンブルクやブフタルマと同等の外国貿易の特権を認め，隊商にコサックの護衛をつけると定め［PSZ 27 : 708（No. 20821）］，対中央アジア・新疆貿易の発展を図った。1857 年に露清貿易史を著したコルサクは，この法令を，ロシアと新疆との貿易が始まり，チュグチャクとグルジャがその中心となるきっかけと見なしている［Korsak 1857 : 417–418］。ロシアと新疆との貿易のはじまりは，ロシア政府の関与した新疆貿易に限定した場合でも，1800 年には，ロシア軍下士官のベズノシィコフ A. S. Beznosikov がアジア人の装いでグルジャを隊商と共に訪れているので［Aldabek 2001 : 52］，1803 年の法令の重要性を過大視することはできない。しかし，この法令が出された 1803 年以降，ロシアと新疆北部との貿易の情報が格段に増えるのは確かである。

1804 年になると，前年のシベリア軍団査察官少将ラヴロフ N. I. Lavrov の提言に基づいて組まれたと考えられる隊商がセミパラチンスクを出発し，カザフのスルタンの仲介を受けてチュグチャク，グルジャ，さらにアクスにまで向かった後帰還した［RKO 1 : 91 ; 中村 2018 : 54］。1805 年に商務大臣ルミャンツェフ N. P. Rumiantsev が記すところによると，チュグチャクやグルジャ等のロシア国境沿いの都市では，清国人とカザフのほかには，タシュケントの商人のみが貿易を許されていた。しかし，鉱山主任ポスペロフ Pospelov による 1805 年の報告からは，ロシア国籍のタタール人やタシュケント人が，ウスチ・カメノゴルスクやセミパラチンスクからグルジャやその周辺の村々に向かい，タシュケント商人やカザフ商人の名前で新疆に入っていたことがわかる［RKO 1 : 860 ; 中村 2018 : 50］。また，上述の 1804 年のロシアの隊商が，新疆北部とともにアクスをも訪れていることから，この時期には新疆の北路と南路との間の交通も可能だったと考えられる。これらの状況から，19 世紀初頭には，新疆における貿易の規制が，エフレモフが新疆を訪れた 1780 年代初頭に比べて緩んでいることが見て取れる。

1805–06 年に，キャフタ以外での公式な露清貿易開始を目指してロシア政府から清朝に派遣されたゴロフキン使節団の試み[14]は失敗した。しかし，その後も非公式なロシア・新疆貿易は一層活発になってゆく。1803 年の新疆からロシアへの輸出額は 69,606 ルーブル 66 コペイカ，輸入額は 50,055 ルーブル 94 コペイカだが，1809 年には，それぞれ 109,434 ルーブル 48 コペイカ，118,771 ルーブル 31 コペイカに跳ね上がっている［Aldabek 2001 : 51］。

1807 年から 1825 年にかけて，何度も新疆や中央アジアに行ったタタール商人ムルタ

13） 1820 年代にはブフタルマはシベリアの重要な税関となったが［Kasymbaev 1990 : 27］，結局は貿易に便利な位置にあるセミパラチンスクとペトロパヴロフスクに伍すことができず，1839 年にブフタルマ税関は廃止された［Aldabek 2001 : 50］。

14） ゴロフキン使節団については，中村 2018 を参照。

ザー・ファイズッリン Murtaza Faizullin は，ロシア政府の命を受けつつ，自らの隊商貿易のために，1807 年 8 月にセミパラチンスクを出発し，新疆北部と南部を広く旅したのち，コーカンドに抜け，タシュケントに至り，ロシア政府に新疆や中央アジアの状況を詳しく報告している。彼は，グルジャには外国人としてはアンディジャン人のみが入境できるが，アンディジャン人の恰好で様々な人々がやってきている，と述べている［Nebol'sin 1855 : 342］。

ファイズッリンは，新疆北部から南部への移動の困難について記していないが，ファイズッリンと同時期の 1810 年前後にラダックから新疆に至ったグルジア（ジョージア）出身の貴族で，外交官としても商人としても活動したラファイル・ダニベガシュヴィリ Rafail Danibegashvili[15] は，ヤルカンドからアクス，ウチトルファンと進み，その後セミパラチンスクに達している。グルジャについては，非常に多くの見張りがいるために，住民がこの都市から許可証無しで抜け出すのは絶対に不可能だと記しており［Danibegashvili : 36］，18 世紀末と同様，新疆の南部と北部の間を移動することが難しい場合があったことが窺える。

ファイズッリンやダニベガシュヴィリと同時期，1808–1810 年に，カーブル出身の商人メフティ・ラファイロフ Mekhti Rafailiv[16] が，カシミールとの貿易に興味を示したロシア政府の意向を受けて，セミパラチンスクからグルジャ，アクス，カシュガル，ヤルカンド，ラダックを経由してカシミールに至っているが，彼はグルジャで将軍 voennyi gubernator から「カシュガルには誰も通すことはできない」と言い渡されたため，グルジャからカシュガルに赴くために賄賂を渡している。ラファイロフは 1813 年に再度ロシア政府によってセミパラチンスクから新疆経由でラダックに派遣されているが，この時には，ラファイロフは往路ではグルジャを避けて，ウチトルファン，アクス，カシュガル，ヤルカンドという経路でカシミールに至り，帰路ではセミパラチンスクに至る前にグルジャに立ち寄っている。帰国後の報告のなかでラファイロフは，グルジャについては，外国人の出入りが厳しく制限され，やってきた場所に戻ることしか許されない，別の場所に行く場合には，カザフのスルタンの従僕として，大枚をはたいて出国せねばならないと述べている［Rafailov : 31–36, 73–76］[17]。

15）ダニベガシュヴィリは，1795 年から 1827 年にかけて，グルジアからインド，イラン，アフガニスタン，清国，ロシア，ビルマ，セイロンなどに 5 回の大旅行を敢行した。第三回目の旅行でセミパラチンスクからロシアに入ったのち，1815 年にはモスクワで第三回の旅行を主要な内容とする紀行文を出版した。本稿では，1815 年の旅行記の再版を利用した。

16）英語の史料では彼の名はメフティではなくマフディとされる。イラン生まれのユダヤ人で，父は商人だったが，幼少の頃に両親を亡くし，父の友人たちに育てられた。長じて独立した商人となった。1807 年に彼はグルジアの大商人セミョン・マダトフ Semion Madatov の手代として，カシミールからセミパラチンスクにショールをもたらし，首都サンクト・ペテルブルクに運んだ。そこでラファイロフは政府首脳と知遇を得た［Moorcroft : 385–386 ; Rafailov : 13–15 ; VPRT. 6 : 160–161, 704 ; Medvedev 2016 : 188–189］。

17）グルジャへの外国人の出入りの規制は，1820 年代にもみられる。1825 年にタシュケントからアクス経由でグルジャに向かったブハラ商人が，グルジャの関所を通してもらえずにアクスに戻り，↗

1811 年には，タタール語に堪能で，シベリア要塞線軍事司令官グラゼナプ G. I. Glazenap の通訳官を務め，また，露清国境地域の調査に何度も赴いているアンドレイ・プチムツェフ Andrei Putimtsev が，シベリアの都市タラの第一ギルド[18]商人ネルピン Nerpin[19]の手代，シベリア・ブハラ人[20]のレシェフ Reshev の率いる隊商とともに，ブフタルマから新疆北部に調査のために派遣された。プチムツェフは隊商とともにチュグチャクからグルジャに移動しているが，グルジャ手前の哨所では，ロシアの商品を持った人間を街に入れることはできないと言われている。しかし，イリ将軍への手紙と馬の贈り物に言及することにより，プチムツェフの隊商は哨所を通ることに成功している［Putimtsev : 47］[21]。

これらの記録からは，新疆北部，特にグルジャへの商人の往来の規制が厳しいことが分かるが，それでも，1811 年 8 月には，「毎年セミパラチンスクからグルジャに商品が送られている」とシベリア要塞線軍司令官グラゼナプが宰相ルミャンツェフに書き送っており，この時期にはセミパラチンスクとグルジャを結ぶ交易路は確固たるものとなっていたことがわかる。ただし，同じ文書に記されているように，この貿易は相変わらずアジア人にのみ許されており，清国人は「明らかにロシアの商品を我々の国境から受け取っているが，タタール人とタシュケント人の手を通してのみ」［VPR T. 6 : 160］貿易が行われた。

この 1811 年の文書には，シベリア要塞線軍司令官グラゼナプが，カシミールから新疆経由でロシアに商品をもたらしたグルジア商人セミョン・マダトフの手代ザハル・シャルギノフ Zakhar Sharginov の提言を受けたことが記されている。この提言に従ってグラゼナプは，アクスでロシアの商品をカシミールやインドの商品に交換するために，「これまでに我々の

↘ そこからセミパラチンスクに至ったことをセミパラチンスク税関で報告している［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 637, L. 13–13ob］。また，同年アクスからグルジャに入ったブハラ人とタシュケント人の商人が，グルジャからセミパラチンスクに向けて出発する許可のために 40 元宝銀を要求されたという記録がある［Konshin 1900 : 82–83］。

18） ロシアでは，18 世紀はじめに資本の大きさによってグループ分けされたギルド（商人組合）が作られたが，ギルド商人以外にも商業が許されていた。1785 年にエカチェリーナ 2 世によって「都市への特許状」が出された際に，商業に携わる者はすべてギルドに登録せねばならなくなり，第一ギルド商人には外国貿易と国内各地の卸取引，第二ギルド商人には国内各地の卸取引と小売取引，第三ギルド商人には登録している都市や管区における小売取引が許可された。1812 年以降は再び農民にも商業の権利が与えられた。1824 年には蔵相カンクリンによってギルド改革が断行され，ギルドの料金が大幅に下げられ，ギルド商人が一気に増加した［Razgon 1999 : 55–70 ; 森永 2010 : 23–25］。また，オレンブルク県と西シベリアでは 1826 年に，全ギルド商人にアジア諸民族との交換取引が許された［TsGA RK F. 478, Opis' 1–2, p. 7］。

19） ネルピンはすでに 1809 年にチュグチャクに，規模の大きな隊商をロシアから初めて送りだしており，その後少なくとも 1812 年まで 3 年間，新疆貿易を続けていた［VPRT. 6 : 310 ; Kasymbaev 1988 : 70］。

20） 17 世紀初頭以降ロシアの支配下に入ったシベリアのトボリスクやトムスク，タラ等に中央アジアのブハラから移住した商人とその子孫。ロシア政府はシベリア・ブハラ人に特権を与えて，その商業活動を支援した［塩谷昌史 2014 : 144, 147］。

21） プチムツェフのチュグチャク，グルジャ訪問については野田 2005 : 47 も参照。

商業が広まっていない場所」に行く危険を訴えるセミパラチンスクのムスリム商人を説得して，1811 年に大規模な隊商をアクスに送り出した［VPR T. 6 : 160］。すなわち，1811 年頃には，グルジャ，チュグチャクにロシア籍の商人の影響が広まっていた一方で，アクスではそうではない，という状況が生まれていたのだった。

グラゼナプはまた，1812 年に蔵相グリエフ D. A. Gur'ev に宛て，清国の都市を訪れるロシアの商人たちを清国人が無関心に眺めていると述べ，さらに，チュグチャクとグルジャの清国人は，ロシアの商人によってもたらされる食料品を，その地の食料品不足のために喜んで受け取るが，彼らをロシアの商人とは知らないように装う，或いは，そう認めることを欲しない，と書いている［VPR T. 6 : 310］。グルジャでは，19 世紀初頭に人口増による食糧問題が表面化し，それが深刻化していった［華立 2012 : 215, 221］。この時期に新疆北部でロシアの商人に対する清朝の規制が緩んだ背景には，新疆北部の都市の発展に伴う食糧問題があった。

1810 年前後のロシア・新疆貿易の活況の原因としては，当時の中央アジアの不安定な政情も挙げられる。1810 年にはブハラとタシュケントからペトロパヴロフスクに，見るべき隊商が一つもやってこなかった［VPR T. 6 : 310］。これは，コーカンド・ハン国がシベリア要塞線と中央アジアを結ぶ中継地だったタシュケントを，1800 年代後半に従属させ，1809 年には，タシュケントを拠点にペトロパヴロフスクへの途上にあるトルキスタンを陥落させたことが原因だろう。さらにコーカンド軍は，1810–1811 年の冬に，これもタシュケント北側のチムケントを包囲したが，このときコーカンドでクーデターが発生し，新たなハンが立った［Levi 2017 : 86–87, 89–90］。中央アジアの混乱した状況のため，対中央アジア貿易が閉ざされたこの時期，西シベリアの商人たちの関心は，対新疆貿易に向けられたことだろう。

1810 年代までに，グルジャとチュグチャクから新疆に入る交易路を確立したロシア政府だったが，グルジャから新疆南部に抜けるのは容易ではなかった。1810 年前後から，ロシア政府はラダックやカシミール，さらにインドとの貿易への関心を強め，新疆南路のアクス経由でこれらの国々の商品の購入を試みた。その後 1820 年代に入るとロシア政府は，アクス南西のカシュガルに草原から入る交易路を模索するようになる。

Ⅱ　1820 年代：タタール商人ファイズッラー・セイフッリンの新疆での活躍

ファイズッラー・セイフッリン Faizulla Seifullin[22] は，セミパラチンスクの町人身分のタタール人で，隊商頭を務める商人だった。彼は，自らの商売の傍ら，新疆方面でロシア政府

22）　TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 3 に「カザンの軍務タタール人ファイズッラー・セイフッリン」とあり，彼は沿ヴォルガ地方の出自と考えられる。この人物については，Valikhanov 1985 T. 2 : 317 ; Noda 2012 : 163 ; Gibadullina 2013 : 154–155 ; 2017 : 169–170 ; Ploskikh 2010 : 17–19 で紹介されているが，管見の限り，彼の 1820 年代の活動全般を分析した研究は無い。

のために様々な活動を行った。本章では，彼が1829年に時の蔵相カンクリンに宛てて記した，彼の国家への貢献に対する報償を願う嘆願書と，それに関連する一連の行政文書［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437］を材料に，1820年代のロシア・新疆貿易を考察する。

セイフッリンが最初に自らのキャリアとして記すのは，1814年にセミパラチンスクの第一ギルド商人イヴァン・サムソノフ Ivan Samsonov[23]の手代として隊商頭となり，隊商を率いてコーカンドに向かい，無事に戻って利益を上げたことである。セイフッリンのように，タタール人やシベリア・ブハラ人，ロシア臣籍を受け入れたタシュケント人などがロシア人商人の手代となる例は，セミパラチンスクなど西シベリア方面の商業都市で特に多くみられる。これは，シベリアのロシア人商人たちが，ジューンガル時代とは異なり，新疆への表立った入境を禁じられたため，隊商貿易のリスクを下げる目的でムスリムの手代を使ったからだった［Razgon 1999 : 219–220］。

セミパラチンスクには18世紀半ばには中央アジアの商人が居住し始めており，また，1780年代には一定数のタタール商人も居住していたが［Frank & Usmanov 2001 : 5］，1789年のギルド商人としては，ロシア人商人が10人いるのみでムスリム商人は見られない［Razgon 1999 : 125］。その後，1794–96年に最初のモスクが建てられた事実は［Frank & Usmanov 2001 : 75, 90］，この時期のセミパラチンスクのムスリム商人の富の増加を示している。1830年の記録によると，セミパラチンスクのギルドに登録されたロシア人商人は18人，ムスリム商人23人，1840年の記録ではそれぞれ59人と146人となっており［Razgon 1999 : 125］，19世紀前半，まさにロシアと新疆北部との貿易が盛んになる時期に，セミパラチンスクが急速にムスリムの商業都市として発展したことがわかる。

セイフッリンが次に挙げるのが，1821年に「私の主人である商人ポポフ[24]」と独立シベリア軍団司令官によって，ロシア領からカシュガルへの道を切り開くために，隊商とともにこの都市に派遣された件である。セイフッリンは，カシュガルでは商品がコーカンドの5倍

23） シベリアの大商家サムソノフ家の創業者。トゥラの職人の出で，1792年に初めてオムスクで商人として登録されている。1795年にセミパラチンスクに移住し，1806年まで第二ギルド商人として登録，1806–27年に第一ギルド，1827–31年には第二ギルドに登録している。多くの手代や部下を用い，多方面の貿易に乗り出して利益を上げた。1798年に市長 Burgomistr に選出され，1799–1802年には，市会議長 Gorodskoi golova を務めた。彼の息子のシドル・サムソノフの代には，サムソノフ家はキャフタ貿易に乗り出した［Razgon 1999 : 233］。19世紀半ばにかけて，サムソノフ家は，グルジャとの貿易に携わるロシア側で最大の商家となった［Sladkovskii 1974 : 214］。

24） ステパン・ポポフ Stepan Popov。ヴェルホトゥリエの商人だったが，19世紀初頭からシベリア要塞線上で商業に携わり，1814年にセミパラチンスクに移住した。1823年にセミパラチンスクの第一ギルド商人として登録している。シベリア要塞線上の都市の貿易所やカザフ草原，中央アジア，グルジャ，チュグチャクで，多くのタタール人やカザフ人を部下として使った。外国貿易振興の功績により1826年に8等文官に相当する商業顧問の称号を与えられた。ウスチ・カメノゴルスクの第二ギルド商人で，のちに金鉱業のパイオニアとなるアンドレイ・ポポフとクリストフォル・ポポフは，ステパンの甥にあたる［Razgon 1999 : 234］。

の値で売れると記している。セイフッリンは，カシュガルでの貿易で主人ポポフのためにも自分のためにも，大きな利益を得たと記すが，クルグズの土地を通過する際に，略奪やクルグズの要求のために 63,845 ルーブルの損失を被った。だが，セイフッリンのカシュガルへの往来は，ロシア政府にとっては政治的に大きな意味をもつものとなった。セイフッリンは，この時にクルグズの一部族の頭目の信頼を得ることに成功し，1823 年のカシュガル再訪の際には，ロシア政府から託された書簡を彼に届け，それが，1824 年のクルグズのブグ族に属する 3 氏族によるロシアへの臣従を願う使節の派遣につながった。セイフッリンは，臣従を願い出るクルグズの使節のオムスクへの往復に同伴し，費用の負担も厭わなかった［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 3–5, 9–9ob, 17ob–18, 21–23ob ; Konshin 1900 : 69–76 ; Bartol'd 1963 : 530 ; Ploskikh 2010 : 33］。

セイフッリンのカシュガル訪問までは，ロシアから草原経由で新疆南部に入る多くの商人はアクスを目指した。アクスへは，先述のシベリア要塞線軍司令官グラゼナプによる 1811 年の隊商派遣ののち，1813 年にもグラゼナプが，32 万 1 千ルーブルの商品を積んだ隊商とこれに同道したラファイロフとともに，十二等官の通訳ブベノフ A. L. Bubenov を，新たな交易路経由で送りだしている。ブベノフはクルグズの最も東のブグ族の長の息子をセミパラチンスクに連れ帰り，1814 年にこの部族はロシアの隊商の護衛を約束した［VPR T. 7 : 584–585 ; Bartol'd 1963 : 529 ; Ploskikh 1970 : 43–48］。

これ以前の 1787 年にも，カザンのタタール商人アブドゥラフマン・ヌールマメトフ Abdrakhman Nurmametov の手代ムスリュム・アガフェロフ Muslium Agaferov によって，ロシア政府からクルグズへの最初の書簡が届けられているが［Ploskikh 2010 : 17］，ロシアの臣民となることに同意したクルグズは，セイフッリンが仲介した 1824 年の例が初めてだった。1820 年代はじめのコーカンド・ハン国による北方への進出が，クルグズによる自発的なロシアへの臣従を促したと考えられる［Ploskikh 1970 : 51–52］。ロシアにとっては，カシュガルとの交易路上のクルグズの臣従は，隊商の安全確保という面でも，新たな交易路の開拓という面でも好都合だった。1824–25 年のクルグズ使節の帰路に同伴したロシア軍には，新疆周辺の交易路を探るよう指示が出され，軍医ジベルシュテイン F. K. Zibbershtein が交易路の調査に派遣された。セイフッリンは交易路の道程について詳しい情報を記していないが，ジベルシュテインの記録により，当時の西シベリア・新疆間の交易路の道程が判明する［Zibbershtein 2007 : 222–253］。

セイフッリンのカシュガル訪問ののち，セミパラチンスクとカシュガルを結ぶ交易路が実際に使われているケースが確認できる。1824 年にカシュガルから，カシュガルの住民 4 人，ムハメド・クルバノフ Mukhammed Kurbanov（55 歳），その息子のヤークーブ・ムハンメディエフ Iakup Mukhammediev（27 歳），イブラヒム・イズマイロフ Ibragim Izmailov（63 歳），ムッラーのマリク・イズマイロフ Malik Izmailov（57 歳）が，マッカ巡礼のために，カシュガルからカザフ草原経由で，半年かけてセミパラチンスクにやってきているのである

［TsGA RK F. 338 Op. 1, D. 592, L. 202-205］。

ロシアでは1789年以降，ロシア臣民のマッカ巡礼者に対して，村の長老の出す許可書と帰路の資金の保証があれば，パスポートが支給された［Brower 1996 : 570］。外国人についても，パスポートが無いためにロシア国境でブハラ人のマッカ巡礼者が足止めされているというブハラの遣露使節からの苦情に応えて，1803年3月23日にはロシア諸都市のブハラ人が巡礼を希望する際には，巡礼者にパスポートを出すことが定められている［PSZ 27 : 509 (No. 20681) ; Arapov 1999 : 298-299］。これ以降，カザフ草原国境地域のロシア側の記録には，商人とともに，ブハラ人やコーカンド人のマッカ巡礼者へのパスポート支給の記録も散見されるようになる。ブハラ人，コーカンド人に交じって，1824年に，上述の4人のカシュガル人にもセミパラチンスクでパスポートが「1803年3月23日の勅令に従って」［TsGA RK F. 338 Op. 1, D. 592, L. 205］問題なく発行されており，新疆南部とセミパラチンスクを結ぶ交易路が，1820年代半ばに新疆のムスリム住民のマッカ巡礼にも使われたことが判明する[25]。

さて，セイフッリンは1821年のカシュガル往来に関して，別の功績も挙げている。第I章2節で言及したラファイロフは，またもやロシア政府の委託を受けて1820年にセミパラチンスクからラダックに，タタール商人ハミト・アミーロフ Khamit Amirov の組織した隊商とともに向かった[26]。今回の訪問は，ラダックの山羊の毛をロシアに輸入してロシアにショール[27]の工場を建てるという，ラファイロフがロシア政府に提案した計画の実現のため

25） カシュガルから草原経由で到着した4人のほかに，もう一人のカシュガル人巡礼者クトゥルク・イマノフ Kutluk Imanov が，1824年に他の4人より前にセミパラチンスクにブハラ人巡礼者トゥルドゥバイ・アリムジャノフ Turdubai Alimzhanov とともに到着している。彼は，カザフとの貿易を目的とする隊商に同行して，カシュガルからアクス経由で9カ月かけてセミパラチンスクに至っている［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 592, L. 129-133, 176-177］。

26） ハミト・アミーロフは，これ以前にシベリア要塞線軍司令官グラゼナプの呼びかけに応えて，セミパラチンスクのタシュケント商人の長ミールクルバン・ニヤーゾフ Mir Kurban Niiazov と，ラフィン・イクサコフ Rafin Iksakov とともにカシミールのショールの取引のための会社を設立しており，アミーロフとニヤーゾフはラダックに行ったこともあった［Maev 1876 : 95-96］。ロシアの使節として1820年から21年にブハラを訪れたメイエンドルフが，多くのロシア籍のタタール人が，セミパラチンスクから，グルジャ，カシュガル，ラダックの町々を抜けてカシミールの町に向かう，と記していることからも［Meiendorf : 129］，1820年前後に，ロシアとカシミールの間では，新疆を経由した貿易が一定程度行われていたことがわかる。

27） 18世紀末のナポレオンのエジプト遠征をきっかけに，19世紀初頭，ラダックの山羊の非常に細い毛で織られたカシミールのショールが，フランスにもたらされ，大流行した。1804年には，セミパラチンスク経由でロシアにも輸入され，1817-19年にはラダックの山羊をシベリア南西の山々で飼育する計画がフランス人によって立てられたほどだったが，この計画は不成功に終わった［Rafailov : 13 ; Maev 1876 : 90-97］。カシミールのショールはロシアにはブハラ経由でももたらされた。先述のメイエンドルフが出会ったカシミールの商人によれば，毎年カシミールからブハラに3千のショールが輸出され，そのうち2千がロシアに再輸出された。19世紀初頭にブハラではカシミールのショールが1枚250-300ルーブルで売られていたが，ロシアでは400-1000ルーブルの値が付いた［Kalandarova 2007 : 97］。

だった。しかし，ラファイロフはラダックで病死し，その情報は 1822 年 5 月にロシアに届いた［Maev 1876 : 96–98］。

カシュガル滞在中にセイフッリンは，ラファイロフがロシア政府によってラダックに派遣されたが，道中で死亡したという情報を得た。そして，ラファイロフの個人的な所持品が失われないように，カシュガルのコーカンド公使 poslannik から書簡を得，また，急使をヤルカンドのラファイロフの従者に送った［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 5ob–6］。のちにロシアに戻ったラファイロフの従者によると，ラファイロフの所持品はラダックの政府に没収されたが，その後コーカンドのハンの要求により，当時ヤルカンドにいたコーカンド公使に宛てて送付されたということであり，セイフッリンの手配がここまではうまくいったことがわかる。しかし，その後コーカンド側は，ラファイロフの所持品を尋ねるロシア側の問い合わせに対して，何も見つからなかったと答えており，セイフッリンの配慮も空しく，結局はラファイロフの所持品の行方は分からないままとなった［Maev 1876 : 98–99］。

しかし，セイフッリンによってヤルカンドに派遣された急使が全くの無駄になったわけではなかった。セイフッリンは，英国人ムーアクロフト[28]の探検隊の，当時ヤルカンドにやってきていた先遣隊に，ラダックにいたムーアクロフトから送られた 7 通[29]の書簡を，この急使に奪取させることに成功した。セイフッリンはこれを，「我々の政府のために害になる企てがその中に含まれていないか」と推し量ってのことである，と記している［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 5ob］。そのうちの 1 通は，ラファイロフの件に関するものだった。セイフッリンは，これらの書簡奪取を，1829 年の嘆願書で，自分の国家への貢献の一つとして挙げている［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 18 ob.］。

セイフッリンが次に挙げる功績は，1827 年に，不在だった自分の代わりに，兄弟シャムスッディーンを，1813 年にアクスに派遣された先述の通訳ブベノフに帯同させ，必要な商品や従者を調達したうえでシャムスッディーンに託して，カシュガルに派遣したことである。セイフッリンは，この派遣は「いくらかの政治的な状況のため po nekotorym politicheskim obstoiatel'stvam」だったと曖昧に述べているが［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 9–9ob, 19］，ブベノフが派遣された理由の一つは，1826–27 年に新疆南部で発生した，ジャハーンギール・ホージャの乱の情報収集だった［Konshin 1900 : 105–114］。

28）　個人的な探検家としてラダックのレーに 1820 年から 22 年まで，チベットへの探検を挟みながら滞在していたウィリアム・ムーアクロフトは，ヤルカンドからカシュガル経由でブハラに抜ける計画を立て，ヤルカンドの清朝当局に入国許可証を申請するために使いを送った。結局この交渉はうまくいかず，ムーアクロフトはヤルカンド行きをあきらめるのだが，ムーアクロフトはその旅行記の中で，ロシアからラダックに派遣されたラファイロフに強い興味を示している［Moorcroft : 383– 391］。ムーアクロフトについては鈴木 1962 : 195–217 を参照。

29）　これら 7 通のうち，3 通がモンゴル語，2 通がペルシャ語，2 通がタタール語で記されていた。これらの書簡はサンクトペテルブルクに送られ，外務省で翻訳された［AVPRI F. 161, Op. 50, 1819 g., D. 4, L. 168–168 ob. ; Rafailov : 24］。

ロシア政府はすでに1826年2月に，カザフ大ジュズのスユク・スルタンSiuk Sultanのもとで書記を務めるカザンのタタール人ムサギト・ムクミノフMusagit Mukminovから，カシュガルでの反乱発生とグルジャからの官軍の派遣について知らせを受けており［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 637, L. 5–6 ; Konshin 1900 : 86–88］，その後，チュメニの町人ナザル・トゥピコフNazar Tupikovからも，1826年6月20日付の報告で，新疆における反乱について，清朝軍の数や死者数，さらに，クルグズの反応まで，詳細な報告を受け取っていた［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 637, L. 18–20］。ロシア政府はこのほかにも，1826年の新疆状況について，セイフッリンを含め，多くの商人から情報を集めている［Konshin 1900 : 83–98］。

ブベノフは，4年前にカシュガルに出発し，ジャハーンギールの反乱時にカシュガルに居住していたセミパラチンスクのロシア人商人ピョートル・ピレンコフPiotr Pilenkov[30]と会うよう，指示されていた。しかしブベノフはこの人物には会えず，ヤルカンド在住のタタール人によって証言された，ムスリムの偽名を使ってのピレンコフのヤルカンド滞在の情報をつかんだだけだった［Konshin 1900 : 109 ; Valikhanov 1985 T. 2 : 319–320］。1820年代には，カシュガルやヤルカンドにロシア臣籍の商人が居住しており，ロシア政府はこれらの商人をも新疆の情報収集活動に利用していたことがわかる。

ブベノフらによってもたらされた新疆についての情報をもとに，1827年にオムスク州総局長スシンSushinによって作成されたジャハーンギール・ホージャの乱に関する報告書では，新疆でのこの事件による貿易の変化を以下のように予測している。コーカンド人やその他の中央アジア人たちは，それまで新疆南部から清国の商品を得ていたが，その可能性を失うため，グルジャとチュグチャクでの交易が栄えてカシュガルにとってかわることが予想される。しかし，グルジャとチュグチャクには，カザフか，カザフの名前のもとにしか隊商が入れず，また，官貿易なので，カシュガル貿易に参入していた人々の需要を十分に満たせない。さらに，グルジャとチュグチャクの貿易が拡大すれば，清朝政府の注意を引くことになって，結局は中央アジア人による新疆北部での貿易は衰退することになるかもしれない。また，そこでの官貿易以外の物々交換はひそかに行われているので，規模が限定される上に，カザフによる略奪の危険もある。以上のために，中央アジア人たちは，茶を求めて我々のところに来るであろう，と［Konshin 1900 : 101–102 ; Valikhanov 1985 T. 2 : 321］。

つまり，中央アジアから新疆北部に直接入る貿易路は，新疆南部への交易路の代わりにはならず，中央アジア商人は，中央アジアからロシアを介して新疆北部と貿易するようになるだろう，という予測である。実際には，反乱が勃発した1826年の夏には，新疆南部から北部に商品が集まらなかったために，新疆北部に赴いたロシアの商人が，もってきた商品をそのまま持ち帰らねばならないという事態も起こった［Aldabek 2001 : 67］。しかし，上の予

30） もともとは西シベリアのイシムの町人。1823年にセイフッリンとともにクルグズ3氏族のもとに派遣され，ロシア臣従の説得にあたっている［Konshin 1900 : 73 ; Baltol'd 1963 : 530 ; Ploskikh 2010 : 18, 26, 28–30, 32–33］。

測を証明するかのように，1826 年 12 月に，ペトロパヴロフスクに 600 頭のラクダからなる隊商が，主に清国向けの商品を積んで到着している。真冬に中央アジアから直接ペトロパヴロフスクに隊商が到着するのは，例のないことだった［Konshin 1900 : 102-103 ; Valikhanov 1985 T. 2 : 321–322］。また，1827 年にロシア側では，アジア商人がこれまでにないほどロシア国境を目指しているという報告が出されている［Noda 2012 : 163］。1830 年のセミパラチンスク税関の記録からは，外国籍のタシュケント，ブハラ，カザフの商人が，チュグチャクとグルジャから盛んにセミパラチンスクに到着していることが分かる［TsGA RK F. 478. Op. 2. D. 124. L. 7–29］。さらに，1825 年頃から，セミパラチンスクからの輸出が徐々に伸びているという事実からも［Liubimov : 22］，1820 年代後半のロシアと中央アジア，新疆間の貿易の発展が窺われる。ジャハーンギール・ホージャの乱による新疆南部の混乱と，それに続いて起こったコーカンド・ハン国と清朝との対立，さらには 1832 年までのコーカンド・清貿易の中断は［佐口 1996 : 232–233］，ロシア側の事前の分析どおり，ロシア・中央アジア間の貿易と，西シベリアを経由した中央アジア・新疆北部の貿易を活性化させる役割を果たしたと考えられる。

カシュガリアにおけるジャハーンギール・ホージャの乱後も，西シベリア・カシュガリア間の貿易の発展はみられなかった。その一因と考えられるのが，先にも言及したコーカンド・ハン国の北方への拡大である。コーカンド・ハン国は 1827 年に，ロシアからカシュガリアに抜ける交易路をおさえるために，ピシュペク（ビシュケク）に軍を派遣し，1830 年代にはこの地域を支配下に置いたのだった［Newby 2005 : 200–202 ; Kilian 2013 : 180–181］。

ところで，セイフッリン自身がジャハーンギールの乱の情報収集に赴かずに，兄弟を派遣したのは，1827 年に彼が，ロシア政府の別の任務を請け負っていたからだった。当時清国領で流行していたコレラ[31]の調査のために，ロシア政府は清国との国境地域に調査隊を派遣した。セイフッリンは，この調査隊に同行したのだった。そして，カザフ大ジュズのサルト・スルタン Sart Sultan[32]のもとに調査隊を残して，セイフッリンは単独でチュグチャクに往復し，政府に必要な情報を収集した。セイフッリンが単独でチュグチャクに行ったのは，

31）　19 世紀を象徴する病気と言われるコレラは，もともとインドに固有の風土病だったが，1817 年に突如としてパンデミックに変化した。ロシア領ではすでに 1823 年にカスピ海沿岸地域でコレラの流行が見られた。本格的なコレラのロシア上陸は，1829 年のオレンブルクからであり，この時には，ロシアからヨーロッパにコレラが広がっていった［見市 1994 : 11, 36 ; Davis 2018 : Chapter 2, Section 2, para. 12］。セイフッリンが調査に赴いた 1827 年には，コレラが清国領からロシアに広がることはなかった。

32）　サルト・スルタンは，1817 年にグルジャとチュグチャクへのロシアの隊商の交通を助けた功績により，金メダルを与えられているが，ロシアだけでなく，清国にも臣従していた。サルト・スルタンと彼のサンクト・ペテルブルク訪問については Konshin 1900 : 11–14 ; Remnev & Sukhikh 2017 : 276–277 を参照。サルト・スルタンのロシアへの臣従により，アヤグズ川に面するサルト・スルタンの土地を通る，ロシアとチュグチャクの間の交易路が確かなものとなった［Kilian 2013 : 250］。1830 年代のサルト・スルタンとロシアとの関わりについては，野田 2011 : 235–236 を参照。

ロシア人の同行者がチュグチャクに入境するのが難しかったからだろう［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 19–19ob］。

この調査ののちすぐ，1828 年はじめにはセイフッリンはカザフのサルト・スルタンのセミパラチンスクからオムスク経由でのサンクト・ペテルブルク行きに同行している［Konshin 1900 : 13］。この件に関しては，サルト・スルタンの口添えにより，セイフッリンは 1828 年に聖ヴラヂミル大綬章金メダルを与えられている［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 19ob］。このサルト・スルタンをはじめとする大ジュズのスルタンたちとロシア政府との 1820 年代からの緊密な関係が，ロシア・新疆貿易の進展を助けることになった［Kilian 2013 : 246］。

このほか，セイフッリンはセミレチエで中国の古い銀貨が大量に発見されたという情報をカザフから得て，甥をそこに派遣して，大きな銀貨 21，小さな銀貨 17 個を購入させている。銀貨は 500 年前のもので，ガディル・ハン Gadil Khan[33]の名前があった。セイフッリンは，これらの銀貨を政府に献上している［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 20］。

セイフッリンは，カザフ草原やその他のアジア諸国に貿易を広め，コレラの調査を行った功績で，1829 年に聖アンナ大綬章銀メダルを授けられ，さらに，古い銀貨に対する報賞が約束された［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 29–29 ob］。

以上のようなセイフッリンの活動は，彼が，実質的にロシア政府の諜報員だったことを示している。彼の本業が商売だったことは，彼が 1829 年の嘆願書において，彼の長年の政府への貢献の報賞の一つとして，カザフ草原とオムスク州での 25 年間の商業の権利を願い出ていることからも間違いない［TsGA RK F. 338, Op. 1, D. 437, L. 20ob］。ただ，セイフッリンは，上述のムーアクロフトの書簡奪取や，銀貨購入の際の行動に見られるように，政府の依頼がなくとも国家の利益のために進んで行動する，国家への忠誠心の厚い商人だった。この忠誠心が，セイフッリンが嘆願書で強調する愛国心にのみ起因するとは考えられない。嘆願書から明らかなように，政府からの報償をあてにしていたのはもちろん，政府の貿易振興策が自らの利益にもなるという計算もあったことだろう。セイフッリンの嘆願書からは，ロシア政府の新疆貿易振興政策を，非ロシア人臣民の商人が進んで支える姿が浮かび上がってくる。

交易路という点で見れば，1820 年代は，ロシア政府が新疆南部との草原経由での交易路の確立に成功した時期だったことが分かる。しかし，この交易路は，1820 年代後半の新疆における反乱勃発により中断され，また，交易路の一部がコーカンド・ハン国の勢力圏内に置かれてしまったため，ロシア・新疆北部間の貿易が活性化することになった。

33） 時期的・地理的にはチャガタイ・ウルスのアーディル・スルタン・ハン（在位 1366–1370 年頃）が合致するが，「ガディル・ハン」が「公正なハン」という称号として使われている可能性も考えられる。

Ⅲ　1830-40 年代：グルジャに赴いたロシア人商人ウフィムツェフ

新疆はキリスト教徒のロシア人には閉ざされた領域だったが，1761-69 年に政府の依頼を受けてカザフ草原，ブハラ，中国辺境の調査に赴いたタラの商人ミハイル・ヴォズミロフ Mikhail Vozmilov や［AVPRI F. 130, Op. 130/3, D. 1］，第 1 章で扱った捕虜奴隷エフレモフとロシア官吏プチムツェフ，第 2 章で言及した，カシュガルとヤルカンドに住んだロシア人商人ピレンコフ，また，1838-39 年にチュグチャクで茶を購入し，清側の関所で「グルグル」の名で知られていたグリゴーリー・ザハロフ Grigorii Zakharov［野田 2011 : 218］等，テュルク系言語を操りムスリムの慣習をよく知るロシア人は，テュルク系民族を装うことで入境できた。ここでは，同様にロシア人であることを隠しながら，1840 年代半ばにグルジャに貿易に赴いたロシア人商人ポルフィリイ・グレボヴィチ・ウフィムツェフ Porfirii Glebovich Ufimtsev の例を見てみよう[34]。

ウフィムツェフは，西シベリアのトゥリンスクの町人の息子で，セミパラチンスクの大商人シドル・サムソノフ[35]の遠縁にあたった。サムソノフは，トゥリンスクを訪れた際，ウフィムツェフの両親に頼み込み，8 才のウフィムツェフをセミパラチンスクに連れて行った。ウフィムツェフは，ロシア語の読み書きと，タタール語，カザフ語，ブハラ語を叩きこまれた。彼が 12 才を過ぎたころ，サムソノフは彼の髪を剃って，タタール人の帽子と服を着せ，タタール人の人足とともにカザフ草原での貿易に送り出した。その後，サムソノフは，彼を 3 回中央アジア（ブハリアと記されている）のコーカンドとタシュケントに送った。そこでウフィムツェフは多くのロシア人と知り合った。聖職者無しにキリスト教正教を信仰してい

34）　ウフィムツェフは，まだ「若者」とみられる年齢の時に，トムスクの市場で修道士パルフェニイ Parfenii（のちのモスクワ大主教管区グスリツキー修道院の院長。自身で大部の旅行記を出版している）と偶然知り合い，彼にグルジャでの自分の経験を語った。その後パルフェニイの勧めに従って，ウフィムツェフは彼に自分の旅について書き記したものを渡した。パルフェニイはそれを自らの手で書き写して，モスクワの府主教に 1851 年に送付している［Ufimtsev : 5-7, 14］。そののち，パルフェニイはウフィムツェフの経験談を含んだ形で，グルジャのロシア人について記事を書き，この記事は，パルフェニイの死後，長司祭で文筆家でもあったカスィツィン D. F. Kasitsyn（Kositsyn）によって 1878 年に雑誌 *Russkii vestnik* に出版された。

20 世紀半ばに，サランスクの文書館でパルフェニイの手になる 1851 年の書簡とその書簡に付されたウフィムツェフの紀行文が歴史家グレナデル M. B. Grenader によって発見された。この紀行文は，モティレフ A. Motyrev によって文書の 2 枚の写真と共にインターネット上に公開されている（https : //krayural. ru/znamenitosti/turinskij-uralskij-puteshestvennik/　（2019 年 4 月 25 日最終閲覧））。

カスィツィンによる出版に含まれる紀行文と，1851 年の書簡の添付版を比較すると，いくらかの齟齬が見られる。カスィツィンによる出版は，書簡添付版の情報を簡略化し若干の補足と脚色を加えたものと考えられる。本稿では両者を参照したが，齟齬がみられる部分については書簡添付版の情報を利用した。

35）　注 23 を参照。

る彼らに依頼されて，ウフィムツェフはのちにニジニ・ノヴゴロドとイルビートの定期市で本とイコンを購入して彼らのもとに送った。

1842年にウフィムツェフが中央アジアに赴いた際，コーカンドでもタシュケントでも商品をさばききれず，タシュケントから，ブハラ人とタシュケント人とともに30日かけてまっすぐグルジャに向かった。グルジャでの売買は利益のあがるものであり，その後セミパラチンスクに戻った。

1844年にサムソノフは商品を積載した2千頭のラクダと共に，ウフィムツェフをセミパラチンスクからグルジャに送り出した。隊商にはウフィムツェフのほかにもう一人ロシア人がいたほかは，すべてタタール人だった。そのロシア人はグルジャへの途上，草原で亡くなった。

ウフィムツェフ一行は，3か月かけてゆっくりグルジャに旅し，到着すると，郊外の市の場所に天幕を張り，そこに商品を並べて商売を開始した。ある日，ウフィムツェフの天幕を訪ねてきた30歳未満と見られる若い清国人が，ウフィムツェフはロシア人だろうと指摘した。彼の隊商全てが市場から追い出されるのではないかと危惧したウフィムツェフが，自分はタタール人だと言っても，その清国人はウフィムツェフの言葉を信じず，自分はロシア人だと告げた。そして，自分たちの祖先は捕虜として北京に連行され，そののち彼の祖父がグルジャに送られて，彼の父と彼自身はグルジャで生まれたと話した[36]。ウフィムツェフが，自分がロシア人だと告白すると，その人物はウフィムツェフを兄弟と呼び，翌日自分の家に招待した。

ロシア人の子孫はグルジャに50人ほどおり，ウフィムツェフは，義兄弟やその他の人々のところを訪れた。彼らはウフィムツェフに，ロシアに移住したいが不可能である，最近2人がロシアに移住しようと逃亡したが，草原で捕えられて，グルジャで恐ろしい死に方をした，と話した。ウフィムツェフは3か月グルジャに滞在したのち，セミパラチンスクに戻った。

1845年にウフィムツェフがグルジャを訪れた際には，彼は市で商品をさばいてロシアに戻る途上草原で，サムソノフから送られた商品を受け取り，グルジャに戻って今度は11か月グルジャに滞在した。その間，清国の商品をもって二回草原に出向き，羊と交換した。

1846年にもサムソノフのもとから商品が届いて，ウフィムツェフはそれらを売りさばいた。その後，カザフのスルタン・ケネサル指揮下の5千人ほどの「山賊」の一団が，セミパラチンスクとグルジャを結ぶカザフ草原の交易路に集結しているという知らせを受けた。ウフィムツェフは急いでグルジャのロシア人の子孫に別れを告げて，草原に出た。「山賊」がどこにいるかをつきとめて，隊商には山を抜ける，清国に近い道を行かせ，ウフィムツェフ

36） グルジャに北京から送られたアルバジン人については Ufimtsev : 16 のほか，Datsyshen 2007 : 124 を参照。

たち 20 人は贈物をもってケネサルのもとに行き，無事に隊商を通してくれるように頼んだ。ケネサルはウフィムツェフの願いを聞き入れて，彼らを 3 日間もてなした。その後，ケネサルの命令に従って，ケネサルの軍の一隊がウフィムツェフらを隊商のところまで送って行こうとしたが，ウフィムツェフらは軍から離れ，別の道を通ってセミパラチンスクに向かい，無事に到着した。ケネサルはウフィムツェフらに一杯食わされたことに気づいたが，セミパラチンスクからウフィムツェフらの隊商のためにコサックが派遣されたことを聞いて，追っ手をかけなかった。ウフィムツェフはその後，隊商とともに貿易に行くことを望まず，トムスクのおばのところで暮らすようになった。

以上がウフィムツェフの紀行文の概要である。セミパラチンスクを代表する商人の一人だったサムソノフが，おそらくは信頼できる手代を得る目的で，遠縁にあたるウフィムツェフを，タタール商人として通用するように鍛えあげた事実からは，ウフィムツェフがセミパラチンスクに連れてこられたであろう 1830 年前後の時期に，キリスト教徒であるロシア人による対中央アジア・新疆貿易が，依然として難しかったことが推測できる。

ただし、清朝側はすでに 1828 年に，ロシア人は，カザフの扮装をすることでのみ清朝領に入ることができる，と認識しており，また，1845 年にグルジャの大臣が，ロシア商人をアジアの装いで来させるように，と述べているという事実は［野田 2011 : 205, 219］，ロシア人がアジア商人を装っている限り，清朝はロシア人の新疆入境を黙認していたことを示している。しかし，ロシア人であることが新疆で衆目を集める場合は別だった。

ウフィムツェフは，上に述べたように，グルジャでロシア人であることが露見して，隊商ごと市から追い出されるのを危惧していた。1845 年にトロイツクから新疆への新たな交易路を開拓したタタール商人アブバキロフも，1849 年にグルジャの関所で清朝の役人に対して尊大な態度をとったためにグルジャに入れなかったロシアの役人について，彼が危害を加えられることなく追い払われたのは幸運だった，彼は「清国の慣例にしたがって，自分の意志で清国の都市に来たロシア人逃亡者と同様，野獣のように鉄の檻に入れられて北京に送られ，そこから同じようにして，今度はキャフタに，ロシアの官憲に引き渡すために送られたかもしれない」［Abubakirov : 14］と書いている。

ロシア人の直接参入のリスクの高さのために，ロシア・新疆貿易ではムスリム商人の活躍が続いた。1830 年代半ば以降，シベリアではギルド商人が全体的に増加していくが，なかでも，カザンやカシモフ出身のタタール人等からなるムスリム商人の数が目立って増加した。1830 年にはシベリアのロシア人商家の数は 468，ムスリムの商家は 15 なのに対し，1840 年にはロシア人商家 636，ムスリム商家 61，1850 年にはロシア人商家 920，ムスリム商家 92 と，ムスリム商家の数も，ロシア人商家に対するその割合も急増している。シベリアのムスリム商家のほとんどは，シベリア要塞線上の諸都市で，対カザフ，中央アジア，新疆貿易に携わっていた［Razgon 1999 : 125］。

1830年代のシベリア要塞線上の諸都市の貿易の発展の背景としては，この時期のロシア・中央アジア間の交易路の変化が挙げられる。ヒヴァ・ハン国と結んだ遊牧民による隊商の略奪を避けるため，ロシアではすでに1820年代半ばには，コーカンド領とシベリア要塞線を経由した対ブハラ貿易が考えられていた。1830年代半ばになると，略奪以外の要因も加わってロシアの対ブハラ，ヒヴァ貿易は減少するが［Kilian 2013 : 169, 243］，代わってシベリア要塞線と新疆の間の貿易が活発になる［濱本 2019 : 216–217］。こうして交易路が東に移動したため，シベリア要塞線上の貿易都市の重要性が，この時期に一層高まったのである。

1830年代後半のロシア・新疆貿易発展の背景には，ロシアにおける茶の需要の増大もあった。セミパラチンスクの茶の輸入量は，1837年の936プード8フント（約15トン）から，1840年の2304プード16フント（約38トン）まで急増し，1836年から1846年の間でみると，茶の輸入量は7倍以上増えている［Aldabek 2001 : 71–72, 74］。

一方，ウフィムツェフが会見したケネサルを指導者とするカザフの反乱[37]は，1837年から10年ほど続き，カザフ草原経由の対中央アジア・新疆貿易に打撃を与えた。ケネサル反乱の動きが最も高まった1839年には，ペトロパヴロフスクでの貿易額が以前の1/3以下に減っている。セミパラチンスクから新疆への交易路にあたるアヤグズ，ザイサン付近の草原でもカザフによる隊商の略奪が行われたが，セミパラチンスクの貿易へのケネサル反乱の影響は，ペトロパヴロフスクほどではなかった［Balkashin 1881 : 6］。ウフィムツェフは，1842年から1845年まで3度新疆を訪れており，1846年に至るまではケネサル反乱の影響は言及されていない。ロシアとカザフの間の貿易に目を向けると，1833–40年にかけて輸出入ともに減少しているが，ロシアのカザフへの輸出が1840年代に増加に転じる［野田 2011 : 217］。これらのことから，ロシア・新疆貿易に対するケネサル反乱の影響は，1840年代にはいると限定的なものとなっていたと推測できる。ただし，ウフィムツェフのように，1840年代に入ってもケネサルによって略奪の危険にさらされた隊商があったことは間違いなく，この時期のロシア・新疆貿易は商人にとって，通常以上のリスクを伴うものだった。

交易路という点で興味深いのは，1842年にウフィムツェフとその同行者のタシュケント商人とブハラ商人が，タシュケントから新疆北部のグルジャに向かっている点である。この年，ウフィムツェフの中央アジアでの商売がうまくいかなかったのは，ブハラ軍にコーカン

37） 1820年代から急速に強まったカザフ草原におけるロシア支配に対して，カザフ草原では1827年以降抵抗運動が頻発し，ケネサル（1802–47）は1837年から47年までカザフ草原における反乱を指揮した。1845年終わりにケネサルはシルダリア沿岸のアク・マスジドを包囲したが，コーカンド・ハン国に従うカザフの支持を得られず，東方のジュンガリア方面に移動した。カザフの大ジュズのスルタンたちはみな1846年にロシアに忠誠を誓ってケネサルを支持せず，先述のスユク・スルタン勢がケネサルを1846年終わりにクルグズ領へ追いやった。この頃にはケネサルは孤立しており，天然痘にかかっていたとも言われる。1847年，ケネサルはクルグズによって殺害された［Kilian 2013 : 208–209］。ウフィムツェフが会った時，ケネサルは大ジュズのスルタンたちの支持を得られず苦しい立場にあり，ウフィムツェフとの会見後ほどなくしてクルグズ領に去ることになったと考えらえる。

ドが占領され［Levi 2017 : 155］，フェルガナ盆地が混乱状態にあったからだろう。ウフィムツェフ一行には，フェルガナ盆地を抜けて新疆南部に行くという選択肢はおそらくなかった。中央アジア・新疆南部間の貿易中断が，ロシア・中央アジア貿易の増加につながった 1820 年代後半とは異なり，1840 年代には，中央アジアと新疆北部との交易路が確立していたことが窺える。

グルジャにおける貿易の活発化に加え，新疆南部の度重なる反乱の動き，また，ロシアから新疆南部への草原ルートのコーカンド・ハン国による占領，さらには，インドやカシミールに対する英国の影響力が強まったことも影響して，1830 年代以降は，ロシア政府による新疆南部の諸都市への積極的な進出の姿勢は影をひそめる。いっぽうで，新疆北部へのロシア籍商人の入境が妨げられる例は 1830 年代に入るとみられなくなり，清朝政府の新疆北部における外国人規制は形骸化の一途をたどる。また，1820 年代から 30 年代にかけては，この交易路を往来する隊商を略奪することが多かったカザフの，ロシアへの従属が強まったために，交易路の安全性も高まって，ロシアとグルジャ，チュグチャクを結ぶ交易路は，ロシア・新疆貿易の中核としてゆるぎないものとなった。ケネサル反乱により，1830 年代末にこの交易路は危険にさらされるものの，ロシアにおける茶の需要の急増は，商人に隊商貿易を継続させ，1840 年代には新疆北部経由の露清茶貿易はさらに増加していくことになった。

お　わ　り　に

ここまで，3 人の越境者による記録を中心に，18 世紀末から 19 世紀前半のロシア・新疆貿易の展開を見てきた。ロシア・新疆貿易の交易路の変遷に絞ってまとめると，以下のようになろう。1780 年代初頭までにロシアのムスリム商人は，非公式なロシア・新疆貿易に乗り出していたが，彼らの多くは中央アジア諸都市経由で新疆に行くか，カザフ草原を抜けてアクスに入っており，アクスから新疆北部のグルジャ，チュグチャクに行くことは稀だった。1800 年前後になると，新疆北部での貿易をはやくから許されていたカザフの仲介を受けて，ロシアの商人が新疆北部の貿易に参入していることがロシア史料から判明する。

19 世紀初頭からは，ロシア政府が新疆貿易の振興政策をとりはじめ，1810 年代には新疆北部との交易路が確立した。この時期には，ロシアから新疆南部を抜けてラダック，カシミールまで行く交易路も盛んに使われるようになったが，新疆北部と南部との間の交通が難しかったため，ロシアからアクスへの交易路がこの時期に改めて注目されることになった。

1820 年代になると，西シベリアから草原を経て新疆南部のカシュガルに入る交易路が開かれた。しかし，1820 年代後半から，新疆南部はジャハーンギールの乱などで政情が不安定になり，1832 年までコーカンド・ハン国と新疆南部の貿易が途絶えたことで，中央アジア・ロシア貿易，さらにはロシアを経由した中央アジア・新疆北部の貿易が発展する。

1830 年代半ばには，イルティシュ要塞線上の諸都市と地理的に近く，外国人の入境制限

に緩みのみられた新疆北部とロシアとの貿易が活発になる。1837 年に始まるケネサル反乱により，カザフ草原を通る隊商の略奪の危険が高まって，ロシア・新疆貿易は打撃を受けたが，この時期にもロシアと新疆との貿易は中断することはなく，1840 年代には反乱の影響は低下した。

すなわち，距離的に近いがカザフの仲介と官貿易という制度により利が薄いと当初みなされていた，ロシアと新疆北部との交易路が，1830-40 年代には主要な交易路となったわけだが，その背景としては，中央アジアと新疆南部の政治的な混乱が引き起こす中央アジア・新疆間の貿易減少，また，清朝政府の新疆北部におけるロシア人とロシアの商品に対する規制の緩み，さらには，この時期にロシアで茶の需要が急増し，ロシアにとってロシア・新疆貿易の重要性が高まったことが挙げられる。

1810-1820 年代にロシア政府が拡大を図った新疆南部経由のカシミール，インド貿易を，1830 年代にはロシア政府は早々に見限ったが，これは，こののち新疆南部で争乱が頻発することを考えれば，先見の明のある判断だったと言える。いっぽうで，この時期の新疆北部へのロシアの経済的な影響力増大は，1851 年に露清間で結ばれたイリ通商条約を経て，1871 年のロシアによるイリ地方併合につながっていくのである。

参考文献

Abubakirov : Небольсин, П. И., Рассказ троицкого 2-й гильдии купца, Абдул-Вали Абдул-Вагапова Абу-Бакирова, о путешествии его с товарами из Троицка в Чугучак, и о прочем. *Географические известия* 2. СПб., 1850, 371-410.

AVPRI : Архив внешней политики Российской империи.

Danibegashvili : Маруашвили, Л. И., *Путешествия Рафаила Данибегашвили в Индию, Бирму и другие страны Азии. 1795-1827.* Москва, 1969.

Efremov : Ефремов, Ф., *Странствование Филиппа Ефремова в Киргизской степи, Бухарии, Хиве, Персии, Тибете и Индии и возвращение его оттуда чрез Англию в Россию.* Казань, 1811（第三版）.

Liubimov : Веселовский, Н., *Поездка Н. И. Любимова в Чугучак и Кульджу в 1845 г. под видом купца Хорошева.* СПб., 1909.

Meiendorf : Мейендорф, Е. К., *Путешествие из Оренбурга в Бухару.* Москва, 1975.

Mir Abdoul Kerim Boukhary : *Histoire de l'Asie centrale :（Afghanistan, Boukhara, Kiva, Khoqand）, depuis les dernières années du règne de Nadir-Châh（1153）jusqu'en 1233 de l'hégire（1740-1818/par Mir Abdoul Kerim Boukhary ; publiée traduite et annotée par Charles Schefer.* Paris, 1876.

Moorcroft : Wilson, H. H.（ed.）*Travels in the Himalayan Provinces of Hindustan and the Panjab ; in Ladakh and Kashmir ; in Peshawar, Kabul, Kunduz, and Bokhara ; by Mr. William Moorcroft and Mr. George Trebeck, from 1819-1825. From Original Journal and Correspondence*

I. London, 1841.

PSZ 27 : *Полное собрание законов Российской империи* XXVII. СПб., 1830.

Putimtsev : Дневные записки переводчика Путимцева. *Сибирский вестник* 7. СПб., 1819.

Rafailov : Воловников, В. Г., Путешествия российского《купца-дипломата》 ; Записки Мехти Рафаилова. *Российске путешественники в Индии, XIX–начало XX вв. : документы и материалы*. Москва, 1990, 10–80.

RKO 1 : *Русско-китайские отношения в XIX веке* I. Москва, 1995.

SIRO 134 : *Сборник императорского русского исторического общества* CXXXIV. СПб., 1911.

TsGA RK : Центральный Государственный Архив Республика Казахстана.

Ufimtsev : Первые известия о русских в Кульдже и присоединение к России Киргизской степи : рукопись инока Парфения, сообщенная Д. Ф. Косицыным. *Русский вестник* 9, 5–21, 1878.

VPR : *Внешняя политика России XIX и начала XX века : документы российского министерства иностранных дел. Серия 1, 1801–1815 гг.,* VI : *1811–1812 гг., ;* VII : *Январь 1813 г.–май 1814 г.* Москва, 1962.

Aldabek（2001）Алдабек, Н. А., *Россия и Китай : торгово-экономические связи в центрально-азиатском регионе XVII–XIX вв*. Алматы.

Arapov（1999）Арапов, Д. Ю., Первый российский указ о паломничестве в Мекку. In : *Россия в средние века и новое время. Сборник статей к 70-летию чл.-корр. РАН Л. В. Милова*. Москва, 293–301.

Balkashin（1881）Балкашин, Н., Торговые движение между Западной Сибирью, Среднею Азиею и Китайскими владениями. *Записки Западно-Сибирского отдела императорского русского географического общества 1881 г.* 3, 1–31.

Bartol'd（1963）Бартольд, В. В., *Сочинения* II–1. Москва.

Brower, B.（1996）Russian Roads to Mecca : Religious Tolerance and Muslim Pilgrimage in the Russian Empire. *Slavic Review* 55 : 567–584.

Datsyshen（2007）Дацышен В. Г., *Христианство в Китае : история и современность*. Москва.

Davis, P. J.（2018）*Russia in the Time of Cholera : Disease under Romanovs and Soviets*. London–New York [Kindle DX version]. Retrieved from Amazon.com.

Eden, J.（2018）*Slavery and Empire in Central Asia*. Cambridge.

Fairbank, J. K.（ed）（1978）*Late Ch'ing, 1800–1911,* I（The Cambridge History of China X）. Cambridge.

Frank, A. & M. A. Usmanov（eds）（2001）*Materials for the Islamic History of Semipalatinsk : Two Manuscripts by Aḥmad-Walī Al-Qazānī and Qurbān'ali Khālidī*. Berlin（ANOR 11）.

Galiev（1994）Галиев, В. З., *Караванные тропы : из истории общественной жизни Казах-*

стана XVII–XIX веков. Алматы.

Gibadullina (2013) Гибадуллина, Э. М., *Татары в российской торговле на территории Казахской степи во второй половине XVIII–60–е гг. XIX вв*. Казань.

——— (2017) *Участие татар в периодической торговле Казахстана. XVIII–начало XX вв*. Казань.

Kalandarova, M. S. (2007) Indian Merchants in Nineteenth–Century Bukhara : Trade Network and Socio–Cultural Role. In : *Traders and Trade Routes of Central and Inner Asia : The "Silk Road", Then and Now* (Toronto Studies in Central and Inner Asia 8). Toronto, 93–108.

Kasymbaev (1988) Касымбаев, Ж. К., Верхнеиртышские крепости в системе азиатской торговли России во второй половине XVIII–начале XIX вв. *Вестник Академии наук Казахской ССР* 2, 65–71.

——— (1990) *Города Восточного Казахстана в 1861–1971 гг. : социально–экономический аспект*. Алма–Ата.

Kemp, P. M. (trans & ed) (1959) *Russian Travelers to India and Persia (1624–1798) : Kotov, Yefremov, Danibegov*. Delhi.

Kilian, J. V. (2013) Allies and Adversaries : The Russian Conquest of the Kazakh Steppe. PhD diss. George Washington University.

Kiugel'gen (2004) Кюгельген, А., *Легитимация среднеазиатской династии мангитов в произведениях их историков (XVIII–XIX вв.)*. Алматы.

Konshin (1900) Коншин, Н., Материалы для истории Степного края (Открытие Аягузского округа. Кара–киргизская депутация 1824 года и о заграничных обстоятельствах). *Памятная книжка Семипалатинской области на 1900 г*. 7, 1–117.

Korsak (1857) Корсак, А., *Историко–статистическое обозрение торговых сношений России с Китаем*. Казань.

Levi, S. C. (2017) *The Rise and Fall of Khoqand 1709–1876 : Central Asia in the Global Age*. Pittsburgh.

Maev (1876) Маев, Н., Опыт разведения кашемирских коз в горах Сибири. *Материалы для статистики Туркестанского края* 4, 90–99.

Medvedev (2016) Медведев, А., *Война империй : тайная история борьбы Англии против России*. Москва.

Nebol'sin (1855) Небольсин, П. И., *Очерки торговли России с Средней Азией* (Записки Русского Географического Общества. Книжка X). СПб.

Newby, L. (2005) *The Empire and the Khanate : A Political History of Qing Relations with Khoqand. c. 1760–1860*. Brill.

Noda, J. (2012) Russo–Chinese Trade through Central Asia : Regulations and Reality. In : Uyama, T. (ed) *Asiatic Russia : Imperial Power in Regional and International Contexts*. London, 153–173.

Ploskikh（1970）Плоских, В. М., *Первые киргизско-русские посольские связи*. Фрунзе.

————（2010）Роль татар в становлении киргизско-российских отношений. In : *Татары в истории Киргизии. Прошлое и современность : материалы Международной научно-практической конференции. г. Бишкек, 6 июня 2009 г.*. Бишкек. 16-45.

Potanin（1868）Потанин, Г. Н., *О караванной торговле с Джунгарской Бухарией в XVIII столетии*. Москва.,

Razgon（1999）Разгон, В. Н., *Сибирское купечество в XVIII-первой половине XIX в. : региональный аспект предпринимательства традиционного типа*. Диссертация, Барнаул.

Remnev & Sukhikh（2017）Ремнев, А & Сухих, О., Казахские депутации в сценариях власти : от дипломатических миссий к имперским презентациям. In : *Мусульмане в новой имперской истории : сборник статей*. Москва, 171-212.

Sladkovskii（1974）Сладковский, М. И., *История торгово-экономических отношений народов России с Китаем（до 1917 г.）*. Москва.

Valikhanov（1985）Валиханов, Ч. Ч., *Собрание сочинений в пяти томах* II, III. Алма-Ата.

Vigasin & Karpiuk（eds）（1995）Вигасин, А. А. & С. Г. Карпюк, *Путешествия по Востоку в эпоху Екатерины II*. Москва.

Zibbershtein（2007）Зибберштейн, Ф. К., Путевые дневники и служебные записки о поездках по южным степям. XVIII-XIX века. In : *История Казахстана в русских источниках XVI-XX веков* VI. Алматы.

Ziiaev（1983）Зияев, Х. З., *Экономические связи Средней Азии с Сибирью в XVI-XIX вв*. Ташкент.

小沼孝博（2014）『清とアジア草原』東京大学出版会.

————（2016）中央アジア・オアシスにおける政治權力と隊商交易：清朝征服前後のカシュガリアを事例に『東洋史研究』75（1），1-36.

華立（2012）農業大開発と移民社会の形成　窪田順平（監修）承志（編）『中央ユーラシア環境史 2 国境の出現』臨川書店，207-256.

佐口透（1963）『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館.

————（1966）『ロシアとアジア草原』吉川弘文館.

塩谷哲史（2017）伊犁通商条約（1851 年）の締結過程から見たロシア帝国の対清外交『内陸アジア史研究』32，23-46.

塩谷昌史（2014）『ロシア綿業発展の契機：ロシア更紗とアジア商人』知泉書館.

鈴木中正（1962）『チベットをめぐる中印関係史』一橋書房.

中村朋美（2018）ゴロフキン使節團の陸路貿易構想：一九世紀初頭のブフタルマ貿易を中心に『東洋史研究』77(3)，35-68.

野田仁（2005）露清の狭間のカザフ・ハーン国：スルタンと清朝の関係を中心に『東洋学報』87,

29-59.
————(2009) 中央アジアにおける露清貿易とカザフ草原『東洋史研究』68(2), 388-358.
————(2011)『露清帝国とカザフ=ハン国』東京大学出版会.
濱本真実(2009)『「聖なるロシア」のイスラーム:17-18 世紀タタール人の正教改宗』東京大学出版会.
濱本真実(2019) タタール商人の新疆進出 小松久男, 野田仁(編)『近代ユーラシアの眺望』山川出版社, 208-227.
松浦章(2002)『清代海外貿易史の研究』朋友書店.
見市雅俊(1994)『コレラの世界史』晶文社.
森川哲雄(2004) 乾隆期におけるキャフタ貿易停止と大黄問題『東アジアと日本:交流と変容』九州大学大学院比較社会文化研究院, 53-73.
森永貴子(2010)『イルクーツク商人とキャフタ貿易:帝政ロシアにおけるユーラシア商業』北海道大学出版会.
吉田金一(1974)『近代露清関係史』近藤出版社.

(公益財団法人東洋文庫)